

## 『法華經』はなぜ排他的差別的言辞を含むのか？

久保 継成

0-0 『法華經』（羅什訳の構成で「提婆達多品」を加えた今日に伝わる全巻）は、第 2 章「方便品」に於いてすべての衆生を仏と等しくして異なることなからしめんとしたの願いを述べ、中段「法師品」では滅後のすべての衆生（ここは明らかに“人びと”）に授記し、本篇のしめくりとなる「常不輕菩薩品」では、めぐり会うすべての男女に常不輕菩薩が“仏に成る”ことを述べる等、例外なく人びとすべてが仏となる思想で貫かれている。

0-1 「方便品」の“開示悟入”の箇所では、衆生の進むべき道、仏知見に至る“道 mārga”を示すと説かれる。

tathāgata-jñāna-darśana-mārgāvatāraṇa-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan  
samyak-saṃbuddho loka utpadyate / { KN 40.7 ; WT 37.13 } .

〈諸佛世尊・・・欲令衆生入佛知見道故出現於世。（大正 9.7 上）〉

さらに偈では仏の“どうしたら？ katham”という姿勢を示し、この教えを“聞いた者は一人の例外もなく”との思いが語られている。

evaṃ ca cintemy ahu Śāriputra

katham nu evaṃ bhavi sarva-sattvāḥ /

dvātriṃśatī-lakṣaṇa-rūpa-dhāriṇaḥ

svayaṃ-prabhā loka-vidū svayaṃ-bhūḥ // 60 // { KN 47.9 ; WT 44.7 }

〈舎利弗當知 我本立誓願 欲令一切衆 如我等無異（大正 9.8 中）〉

eko 'pi sattvo no kadā-ci teṣāṃ

śrutvāna dharmāṃ na bhaveta buddhaḥ /

prañidhānam etad dhi tathāgatānāṃ

caritva bodhāya carāpayeyam // 100 // { WT 51.6 (KN 53.3) }

〈若有聞法者 無一不成佛 諸佛本誓願 我所行佛道 普欲令衆生 亦同得此道  
（大正 9.9 中）〉

0-2 「法師品」のいわゆる総授記は、滅後の善男子・善女人になされる。  
ye 'pi ke-cid ... tān ... kula-putrān vā kula-duhitṛ vā ...

(144) 『法華經』はなぜ排他的差別的言辞を含むのか？(久保)

{ KN 224.8, WT 196.11 } 〈有人 (大正 9.30 下)〉

誰かれない男女を差別なく対象としていることを示す。

さらに、授記の段の直後に、経はことさら“どのような衆生 (sattvā, 生きとし生けるもの) が仏になるのか？”という設問を設け、前段で述べてきた“善男子・善女人”であるという答えを出している。“人なら誰でも”ということ強調し、確認していると言える。

tatra Bhaiṣajyarāja yaḥ kaś-cid anyataraḥ puruṣo vā strī vāivaṃ vadet / kīḍṛśāḥ khalv api te sattvā  
bhaviṣyanty anāgate 'dhvani tathāgatā arhantaḥ samyak-saṃbuddhā iti / tasya Bhaiṣajyarāja  
puruṣasya vā striyā vā sa kula-putro vā kula-duhitā vā darśayitavyaḥ /

{ WT 197.6 ( KN 225.11, anyataraḥ vā puruṣo strī, なお WT197 note1 は KN 本文と異なる ) }

〈薬王、若有人問何等衆生於未來世當得作佛，應示是諸人等於未來世必得作佛

(大正 9.30 下)〉

0-3 「常不輕菩薩品」に説かれる釈尊前生の常不輕菩薩の修行は、会う男女すべての人に、“私はあなたたちを軽く思うことは出来ない。なぜなら、あなたたちは菩薩の修行をすべき、仏に成る人だ”と呼びかけたというものである。

nāhaṃ āyuṣmanto yuṣmākaṃ paribhāvāmi / aparibhūtā yūyam / tat kasya hetoḥ / sarve hi bhavanto  
bodhisattva-caryāṃ carantu / bhaviṣyatha yūyaṃ tathāgatā arhantaḥ samyak-saṃbuddhā iti

{ KN 378.1 ; WT 320.5 }

〈我深敬汝等，不敢輕慢。所以者何，汝等皆行菩薩道，當得作佛。

(大正 9.50 下)〉

nāhaṃ bhagīnyo ... (以下、同趣旨) { KN 378.6 ; WT 320.12 } 〈欠訳 (大正 9.50 下)〉

ここで注目すべき点は、常不輕菩薩はこの修行を生涯全うすることで、死が近づいた時『法華經』にめぐり会ったと説かれている。『法華經』の教えにめぐり会うことによって行った修行ではなく、その修行を行うことによって『法華經』にめぐり会ったというのである。

『法華經』は、人間が本来もっている人間性を行動に顕すことの価値を説いていると言える

1-0 それでありながら、『法華經』には譬喩品の偈、安樂行品、普賢菩薩勸発品等、差別意識を前提としたと読み得る言辞が現れる。それは何故か。

『法華經』は、追い求めるべき人間の理想を、人間の現実を直視する中で主張しているからである。

1-1 「譬喩品」では<sup>1)</sup> vv112,113 で、要旨 “この教えを√ kṣip (棄てる、受けつけ

ない／批判する、誹謗する）する者の vipaka（結果／報い）を聞け {WT 88.21 (KN 93.13)} 〈若人不信 毀謗此經・・・汝當聽説 此人罪報・・・其有誹謗 如斯經典 見有誦誦 書持經者・・・此人罪報 汝今復聽（大正 9.15 中）〉として、以下（vv 114～121 {WT 89.3 (KN 94.3)}）阿鼻地獄、畜生の苦しい生涯の描写〈入阿鼻獄・・・當墮畜生 若狗野干 其影頰瘦 鬣黧疥癩・・・有作野干・・・身體疥癩・・・更受蟒身・・・聾駘無足・・・（大正 9.15 中下）〉のあと、VS122 より人の身体を得た時の（*puruṣ'ātmabhāvaṃ ca yadā labhante* KN 95.5 ; WT 90.12）描写に入る。

*puruṣ'ātmabhāvaṃ ca yadā labhante te kuṇḍakā laṅgaka bhonti tatra |*  
*kubjā 'tha kāṇā ca jaḍā jaghanyā aśraddadhantā ima sūtra mahyam|| 122 ||*  
*apratyaniyāś ca bhavanti loke pūti mukhā teṣa pravāti gandhaḥ |*  
*yakṣa-graho ukrami teṣa kāye aśraddadhantān' ima buddha-bodhim|| 123 ||*  
 { WT 90.12 (KN 95.5) }

〈若得爲人 諸根闇鈍 婁陋攀躄 盲聾背偻 有所言説 人不信受 口氣常臭 鬼魅所著（大正 9.15 下）〉

このような描写が、VS134 まで続く。それは人間の苦の実態をあげているものと考えられる。“四肢が不自由であったり、目や耳が不自由になったり（VS122）、世の中に受け入れられず、夜叉の魂が乗り移ったような生き様となる（VS123）”。要旨以上のように始まり、他人に使われ苦難が続く人生、他人の悪業が己に降りかかり不幸から抜けられないといった描写が続く。VS131 では、“彼にとって庭は地獄であり、家庭は悪趣の世界だ”とも言う。

これらの描写の延長に VS132 で視覚や聴覚の障害をあげ、VS133 では *vicarcikā*, *kaṇḍū*, *pāman*, *kuṣṭha*, *kilāsa* といった皮膚の疾病をあげている。この点、羅什が「癩」の文字を訳文に用いているが、ハンセン氏病に対する今日的理解をそのまま当てはめて理解するのは短絡であろう。

VS134 はこのような心身のあり方での生き様を畜生と変わらないものと述べ、VS135 では、“この経を√*ksip* する者の *doṣa*（悪い状態、誤り、罪業）は語り尽くせない。” {WT 92.12 (KN 97.3)} 〈謗斯經故 獲罪如是 告舍利弗 謗斯經者 若説其罪 窮劫不盡（大正 9.16 上）〉と結んでいる。

この個所の意味を理解するためには、「譬喩品」の構成上の位置と説かれる内容との関連を検討する必要がある。

「譬喩品」では、釈尊は一切衆生の父であると説かれる。しかし、火宅にいる

500を超える衆生(夜叉たち)に対し火宅を出た“子供”は20人である。他は火宅での生き方に無反省に残り、同品の物語りの中では放置されたままである。これは、「方便品」品末で、濁悪世の欲に執われた衆生はこの仏説を受け入れられない(VV141, 142, KN 58.11; WT 57.19)とし、「譬喩品」品末で舍利弗に愚者にはこの法を説くなど説かれる(VS136, KN 97.5; WT 92.16)姿勢に通じる。この姿勢は、「序品」で六趣(六道)を仏世界の衆生の全貌としてとらえ、「方便品」で仏が五濁に出世することを説く仏世界観を前提とするとと言える。

持経者に教示されるこの姿勢は、中段、教派の対立者に対する「勸持品」の kṣānti-bala { KN 267.6; WT 229.9 } <大忍力(大正9.36上)>と「安樂行品」の sukha-shita { KN 285.3; WT 243.18 } <能住安樂(大正9.38上)>を経て「隨喜功德品」での聞法者が誰れかれなしにその受けとめた内容を語っていく設定、前述(0-3)「常不輕菩薩品」の会う人ごとにその成仏を訴える姿勢へと展開している。

また、すべての衆生がこの品で火宅に喩される三界を出ることは、論理的には三界の否定となろう。この点は、「如来寿量品」に至ると

yadā 'pi sattvā ima lokā-dhātum paśyanti kalpenti ca dahyamānam /  
{ VS11, KN 324.13; WT 276.20 } <衆生見劫盡 大火所燒時(大正9.43下)>との説示に展開していると考える。

1-2「安樂行品」では、修行者が修行を全とうするために守るべき ācāra, gocara (行処, 親近処)をあげる中に、以下の部分がある。

katamaś ca Mañjuśrīr bodhisattvasya mahāsattvasya gocaraḥ | yadā ca Mañjuśrīr bodhisattvo mahāsattvo na rājānaṃ saṃsevate na rāja-putrān na rāja-mahā-mātrān na rāja-puruṣān saṃsevate na bhajate na paryupāste nōpasamkrāmati nānya-tīrthyāṃś caraka-parivrājaka-jīvaka-nirgranthān na kāvya-śāstra-prasūtān sattvān saṃsevate na bhajate na paryupāste | na ca lok' āyata-mantra-dhārakān na lok' āyatikān sevate na bhajate na paryupāste na ca taiḥ sārddhaṃ saṃstavaṃ karoti | na cañḍālān na mauṣṭikān na saukarikān na kaukkuṭikān na mṛga-lubdhakān na māṃsikān na ṇaṭa-nṛttakān na jhallān na mallān nānyāni pareṣāṃ rati-kṛīḍā-sthānāni tāni nōpasamkrāmati | na ca taiḥ sārddhaṃ saṃstavaṃ karoty anyatrōpasamkrāntānāṃ kālena kālaṃ dharmāṃ bhāṣate taṃ cānīśrito bhāṣate | śrāvaka-yānīyāṃś ca bhikṣu-bhikṣuṇy-upāsakōpāsikā na sevate na bhajate na paryupāste na ca taiḥ sārddhaṃ saṃstavaṃ karoti | na ca taiḥ saha samavadhāna-gocaro bhavati caṅkrame vā vihāre vā 'nyatrōpasamkrāntānāṃ cāiṣaṃ kālena kālaṃ dharmāṃ bhāṣate taṃ cānīśrito bhāṣate | ayam Mañjuśrīr bodhisattvasya mahāsattvasya gocaraḥ || { WT 235.17 (KN 275.11) } .

<云何名菩薩摩訶薩親近處。菩薩摩訶薩，不親近國王王子大臣官長，不親近諸外道梵志尼

婁子等。及造世俗文筆讚詠外書，及路伽耶陀逆路伽耶陀者。亦不親近諸有兇戲相掬相撲，及那羅等種種變現之戲。又不親近旃陀羅及畜猪羊鷄狗吹獵漁捕諸惡律儀。如是人等或時來者，則爲說法無所希望。又不親近求聲聞比丘比丘尼優婆塞優婆夷，亦不問訊。若於房中，若經行處，若在講堂中，不共住止。或時來者，隨宜說法無所怖求。  
(大正 9.37 上)

そして、この部分にひきつづき、女性や性同一性障害の人に近づかないことも述べている。

この戒めは、『法華經』に拠る男子出家修行者に向けての心得であり、前記「譬喩品」の例とは性質を異にする記述である。ただし、持経者の修行の爲の心得であるとの理解なしに受けとめれば、偏見、差別の言辭ともなりかねない。なお、偈では概ね同様の記述がある。{ WT 237.18 (KN278.8) } (大正 9.37 中)

1-3「普賢菩薩勸発品」では品の終わりの方で、釈尊より、普賢菩薩の加護により修行する法師は釈尊から『法華經』の説法を聞いたことになることと説かれる。そして、その善男子善女人について、「安樂行品」の親近処として説かれる要旨と通じる記述が現れる。{ KN 480.8 ; WT 389.12 } (大正 9.62 上)

また、この經を受持する者を惑わし、非難を浴びせる者について「譬喩品」に見た内容に通じる記述がある。

ya evaṃ sūtrānta-dhāraṇāṃ dharma-bhāṇakāṇāṃ bhikṣūṇāṃ moham dāsyanti jāty-andhās te sattvā bhaviṣyanti / ye cāiṣaṃ-rūpāṇāṃ sūtrānta-dhāraṇāṃ bhikṣūṇāṃ avaṇaṃ saṃsṛāvayisyanti teṣāṃ dṛṣṭa eva dharme kāyaś citro bhaviṣyati / ya evaṃ sūtrānta-lekhakāṇāṃ uccagghanaṃ kariṣyanti ullapiṣyanti te khaṇḍa-dantāś ca bhaviṣyanti virala-dantāś ca bhaviṣyanti bibhats' oṣṭhās ca bhaviṣyanti cipīta-nāsāś ca bhaviṣyanti viparita-hasta-pādāś ca bhaviṣyanti viparita-netrāś ca bhaviṣyanti durgandhi-kāyāś ca bhaviṣyanti gaṇḍa-piṭaka-vicarci-dadru-kaṇḍv- ākirṇa-śarirāś ca bhaviṣyanti / ya idṛśāṇāṃ sūtrānta-lekhakāṇāṃ sūtrānta-vācakāṇāṃ ca sūtrānta-dhāraṇāṃ ca sūtrānta-deśakāṇāṃ cāpriyāṃ vācāṃ bhūtāṃ abhūtāṃ vā saṃsṛāvayisyanti teṣāṃ idam āgādhatarāṃ pāpakaṃ karma veditavyam / { WT 390.8 (KN 482.5) }

〈若有人輕毀之言。汝狂人耳。空作是行終無所獲。如是罪報當世無眼。若有供養讚歎之者。當於今世得現果報。若復見受持是經者。出其過惡。若實若不實。此人現世得白癩病。若有輕笑之者。當世世牙齒踈缺。醜唇平鼻。手脚繚戾。眼目角睐。身體臭穢。惡瘡膿血。水腹短氣。諸惡重病。(大正 9.62 上)〉

羅什訳で「葉王菩薩本事品」以降の品も加わった形の『法華經』全巻を仕上げた人(たち)は、当然のことながらそのすべてを經典として主張している。

その際、「常不輕菩薩品」にまで高めた人間の向上心への期待を仏説として主

(148) 『法華経』はなぜ排他的差別的言辞を含むのか？ (久保)

張する以上、人間社会の現実に現れている人間の愚かさとその結果として招いている“苦”の実態を踏まえざるをえなかった。

「薬王菩薩本事品」以降においても、妙音、観世音の示現という形で、人間関係への期待が説かれている側面も忘れてはなるまい。

人間性の発揮に期待するという『法華経』の思想に聞く耳を持ってもらわなければ、苦の連鎖は続く、その事を『法華経』は説いていると考える。

1) 「譬喩品」の偈については、本発表に先立ち、駒澤大学教授松本史朗博士より成立史的観点よりの傾聴すべきご高見を拝聴した。

〈キーワード〉 法華経, 苦, 差別

(在家仏教こころの研究所代表, 文学博士)

### 会費に関する内規

(1) 会費は、年額次の通りとする。

①普通会員 六、五〇〇円

②名誉会員 免除

③維持会員 従来の負担金額

④特別維持会員 五〇、〇〇〇円以上

⑤準会員 六、五〇〇円

(2) 本内規の変更は理事会の議決による。

(3) 本内規は平成五年五月二十二日より施行する。

in the case of (2).

### 172. The Thirty-two Marks of Physical Excellence of a Buddha in the \**Saḍpāramitā-saṃgraha-sūtra* and the *Prajñāpāramitā-sūtras*

Chikako ITO

The \**Saḍpāramitā-saṃgraha-sūtra* (*Sp*) which is one of the stories of past lives of the Buddha distributes 91 stories to the Six Pāramitās. *The Sadāprarudita bodhisattva* story (No. 81) in it is placed in the chapter of meditation. The *Prajñāpāramitā-sūtras* (*Pp*) have the same kind of stories. In this paper I concentrate on the *Sp*. I investigate whether *Sp* is older than *Pp* with regard to the bodily features of a buddha.

In *Sp*, buddha was purplish gold, the back of his head emitted rays of light, and his face looked like a full moon.

But in *Pp*, buddha had the 32 physical characteristics and the 80 minor physical marks. They were the vocabulary which everyone had already understood.

The 32 physical characteristics and the 80 minor physical marks are variously listed. For example, 'full moon face' was added to the 32 physical characteristics in a later period.

Therefore, the *Sadāprarudita story* in *Sp* was written earlier than that in the *Prajñāpāramitā-sūtras*.

### 173. Why do Discriminatory and Exclusive Expressions Appear in the Lotus Sutra?

Tsugunari KUBO

The charm and power of the Lotus Sutra is found in the fact that it entrusts the task of personal and societal benefit to human beings themselves. Yet, why would the Sutra propose to do this if these same human beings are people who are not buddhas, and who are constantly misled by their own intentions and desires?

The Sutra's ideal concept, as seen in from the perspective of the Buddha, is that the whole human life situation, i.e., physical and social matters as well as spiritual ones, can be changed or improved through development of their own awareness and subsequent reformation of their spiritual condition. However, if one takes the compilers of the sutra to be the actual authors of the explanation, the contents of the sutra can be seen as an aggressive criticism of those who hold views opposing those of the followers of this sutra. The correct reading can be grasped through a comprehensive understanding of the entire text.

The final repetition of its admonition to humanity reflects the actual condition of human society during the time of the compilation of the text. The condition is all the same in our modern society. The value and importance of the sutra's perspective is underlined through its premise that human beings possess a basic and essential nature of goodness, and that, through their own actions and attitudes, they can engineer the improvement of themselves and their society.

#### 174. An Aspect of Śākyabuddhi's Interpretation of Apoha theory

Kenshō OKADA

As pointed out by recent studies such as Funayama [2000] etc., Śākyabuddhi, commenting on PVSV ad PV I.169, offers a three-fold interpretation of the word *anyāpoha* or “exclusion of others”. However, it remains untouched in what context he presents this interpretation. The aim of this paper is to clarify how Śākyabuddhi's interpretation is connected with the Sāṃkhya school's objection which Dharmakīrti rebuts in PV I.169. In my view, Śākyabuddhi presents the three-fold interpretation of *anyāpoha* for the sake of protection against the Sāṃkhya's objection. In PV I.167'cd ff. Dharmakīrti criticizes the universal which the Sāṃkhya school defines as external, eternal and non-different from individuals. According to Dharmakīrti, the following faults would occur: 1) all individuals arise or disappear simultaneously; 2) if the rebutter doesn't consent to it, the universal must be admitted